

色丹島訪問記 平成18年9月14日～18日

富山県民会議事務局 西田 国司

(黒部市役所 企画政策課)



〇はじめに

私は、今年の4月より北方領土関連の業務を引き継ぐこととなった。私の勤務している黒部市の海岸部は、北海道について引揚者が多い富山県の中でも、最も引揚者の方が多い地域である。

しかしながら、私は、黒部市でも山沿いの地域に住んでおり、北方領土問題が戦後から今までずっと残っているということは知っていたが、当時の暮らしや現状の様子などを知る機会がなのまま北方領土関連の担当になり、配属当初は、何をどのようにすればいいのかわからず、また、領土問題は国の主権に関わることであり、自分で何とかできる仕事ではない、自分とは遠いところで解決される問題と思っていたものである。

元島民の方と接する機会を持ち、当時の話やもう一度故郷に戻りたいという切実な思いを聞き、この問題は身近に現在も進行している問題であると感じた。

そのうち、北方領土関連の業務を進めるうちに、北方領土に関する知識を得て、運動の経緯を知るうちに、過去からの運動の推移を見て、このままでは今までとなにも変わらないのではないかと焦りを感じはじめていた。そんなときに、このビザなし訪問参加の話があり、今の運動に何かプラスアルファになるものを発見できればと思い参加させていただいた。

〇9月14日

初日の午前中の研修で、北方四島の歴史、問題点を再確認し、午後に北方館へ移動して納沙布岬より見る島は、まさに目の前にあり、銃撃拿捕事件の現場である貝殻島も泳いでいけそうな距離であった。銃撃拿捕事件はまさに北方領土問題に起因する事件であり、この問題さえ発生していなければ、解決していれば、尊い命が奪われずに済んだと思うとやるせない気持ちになった。また、改めて返還への強い意志が固められた。

〇9月15日

2日目、根室港より出航、天気は快晴、波も穏やかであった。この日は一日中船の中で過ごすこととなったが、北海道派遣団下船のため国後島古釜布湾に停泊していた際に、国後島を間近に見ることができた。海岸付近を走る車からは砂煙が上がり、また、湾にはいくつかの大きな漁船が停泊していた。このとき、銃撃拿捕された坂下船長はこの島に拘留されているが、船は現在色丹島に係留されていることを聞いた。この日は、このまま色丹島に向かい、穴澗湾に到着、翌日の上陸に備える。

〇9月16日

3日目、はしけ船にて上陸、湾内には水産加工場より排出され



湾内に浮く魚の残骸

た魚の残骸が浮いており、環境汚染の現状を浮き彫りにしていた。また、昨年までは直接棧橋にロサ・ルゴサを接岸していたが、湾内には大量のヘドロが堆積しており棧橋への接近が困難になったため、はしけ船を利用しているとのことであった。

この後、水産加工場視察、パナセンコ工場長より説明を受ける。工場長の話によれば、この工場は極東地域最大級の工場であるとのこと。また、魚粉に対する需用も高まってきており、近く魚粉を製造する機械を導入し、試験的に進める予定であること。この魚粉の製造がうまくいけば、



水産加工場

湾内の環境汚染の問題も解決に向かうのではないかと楽観視していた。しかしながら、私はこの話を聞き、汚染自体に何らかの手を打つのではなく、あくまでも、魚粉製造の副産物として、魚の残骸を減らすというものであり、採算ベースに乗らない場合は、取りやめるであろうし、工場廃水についてはそのまま流しつづけるのだろうかと不安を感じた。

次に我々は、穴澗の新しい学校を視察・行政関係者との意見交換を行った。学校は9月より開校し、ビザなし訪問団では我々が一番最初に校舎の中に入ったということであった。校舎の屋根はスレート、壁はボードでできており、造りは簡素であったものの、情報処理室には最新のコンピュータが備え付けられており、区長、校長をはじめ、



自慢の新校舎

ロシアの方々是非常に自慢していた。また、この新しい校舎は、前回のクリル発展計画の賜物であり（実際には学校しか計画とおりに完成していないらしいが）、第2次クリル発展計画に非常に期待しているようであった。この第2次クリル発展計画は今後約10年間に179億ルーブルを社会資本の整備（道路、上下水道、電力、空港）に投入するとのことであった。

残念ながら、行政関係者との意見交換では、北方領土問題に関してあまり意見が出なかった。時間がなかったことも原因の一つであったらと思うが、私自身、まだ翌日の対話集会があるという安心感や交流というものの中でどこまで、踏み込んでいいのか戸惑う部分があった。往きの船の中などで、団員同士による討論会を開催し、参加した団員が北方領土問題に対して、どのような考えを持っているのか引き出しておいた方が、意見交換などの場で意見を出しやすいのではないかと感じた。

この後のホームビジットの際には、ワレーリー一家には、ボルシチなどの大変おいしい家庭料理を出していただき親密な交流を行うことができた。また、クリル発展計画に対する本音も

聞かせてくれた。「クリル発展計画にはそんなに期待していない。前回もかなり期待をもたせるようなことをいって、結局は学校一つ作るのがやっとだった。無秩序（きまりどおりにいかないこと）がロシア人の気質であり、そうでなかったらロシア人ではない」と笑いながら言っていた。この家族との交流を通して、ロシア人に抱いていた暗い、怖いといったイメージが払拭された。こんなに友好的な家族ばかりなら、60年余りに及ぶ北方領土問題も早く解決することができるのにと感じた。

この後の夕食交流会にもワレーリイ夫妻が来られて、楽しいひと時を送ることができた。交流会には、訪問団側から合気道演武披露が行われ、和やかな雰囲気のまま終了できた。

09月17日

4日目、新校舎において住民との対話集会が行われた。北方領土問題に関するテーマになると、「ホームビジットの受け入れをしてきて、いろいろな日本人と会ってきたが我々と同じであると感じた。問題の解決にはお互いの譲歩が必要」との意見が出る一方で、「領土問題は作られた問題であり、次世代に解決を委ねたい」「領土問題は国が解決してくれる」「大統領が決定することであり、我々はそれに従う」「子供にはこの問題を振らないで欲しい」といった逃げ腰の意見が多かった。こうした意見の背景には、まさにこの色丹島は、大統領が返還を表明している島であり、自分たちにはどうすることもできない不安があるのではないかと感じた。しかしながら、対話集会などを通じて北方領土問題について議論することは、返還の際に色丹島に住むロシア人がそのまま残るのかどうかの選択や返還後の共住・混住へのスムーズな移行には必要不可欠であるように感じた。

次に、色丹島に住む住民とスポーツ交流・文化交流を行ったが、自分が担当した竹とんぼの交流には、子供たちが本当に楽しそうに参加していた。4歳から12歳の子供たちが笑顔で竹とんぼを飛ばし、追っかけていた。また、遠くで見ていた子供も手招きすると、最初は警戒していたようだが、すぐに打ち解け交流に参加していった。

この様子を見る限り、北方領土返還の問題はきつとうまくいく。いつの日か日本に返還され、この地に混住・共住することになっても仲良くやっていけると感じた。その後、夕食交流会、花火交流が無事終了し、問題なくすべてのビザなし交流の予定を終了することができた。

〇最後に

今回のビザなし訪問を通じ、返還運動のあり方も今までのようにただ返せというだけでなく、返還されたときに、我々はどのような対応を示すべきなのか、我々の内部でもっと具体的に議論し、北方領土に住むロシア人に提示し、議論を進めていくべきだと感じた。

領土の問題は、国と国の外交により解決される問題ではあるが、しかしながら、国の外交の後ろ盾となるのは、間違いなく世論の力であり、それは北方領土に対する我々の正しい共通認識と熱意により、構成されるものである。今後、ビザなし訪問に参加させていただいた体験を、北方領土返還に向けた仕事に十分に生かしていきたい。